迷宮と根の国

荒川　理恵

はじめに

「迷宮」と言う言葉から、人は何を連想するであろうか。

辞書的な意味において「迷宮」とは、出口が容易に見つからないように、部屋や通路が入り組んで、迷路のように作られた宮殿であり、転じて、事件などが入り組んで、容易に解決がつかないことを言うとされる。事件などでは、その困難の奥にある真実を求めて、外部の人間は立ち向かうのであり、犯罪者は、秘匿したい不都合な事実を迷宮の奥深くにしまいこむのである。出口が容易に見つからないということは、ひとたびその中に入った者は、相当な困難を克服せねば、脱出できないということだ。

ギリシア神話「テセウスのミノタウロス退治」は、アリアドネとのロマンスも相俟って、迷宮から生還した英雄の物語として第一に想起されるのではないだろうか。

神話では、クレタ島の王ミノスがダイダロスに命じて作らせたという、牛頭人身の怪物ミノタウロスを幽閉した迷宮が語られる。ミノスが、ポセイドンへの奉げ物である美しい牡牛を横領・着服した神罰として、王妃パシパエからミノタウロスは生まれた。世俗的な見方をすれば、ミノタウロスは、ミノス王の犯した罪を暴き立てる、動かぬ証拠であり、

クレタの迷宮はその不名誉な事実を隠すための装置であった。迷宮は中心へ中心へと進ませるように作られているという。それゆえ、ミノタウロスも外へ出ることが出来ないのである。つまり、中心に辿り着くことはむしろ容易でさえあるが、そこから帰還することが困難なのであり、しかも、その中心には恐ろしい秘密がある。

その困難に敢えて立ち向かい、迷宮の内部へと分け入って行く動機は何なのか。テセウスが、迷宮内に隠された怪物を果敢にも退治するのは、生贄となるアテネの若者たちを救わんが為である。

また、迷宮を構成する重要な要素として、その建築物の内部に隠されて居る秘宝があげられるだろう。

近年、世界的な愛読者を獲得し、映画としても圧倒的な興行成績を誇る、イギリスのファンタジー小説『ハリー・ポッター・シリーズ』の中でも、命の危険を冒して行われる競技のひとつとして、巨大迷路の中に隠された優勝杯を探し求めるという場面がある。こうした隠された宝の存在も、迷宮を迷宮たらしめている要素の一つであろう。

迷宮は、一旦その中に入った者が、様々な困難を乗り越えた後、宝を獲得し、再び出てくることによって、自らと外界をともに変容させる装置であることがその本質であり、人々を惹きつける魅力となっているのだと思われる。

このように考えてくると、迷宮とは一種の他界であり、中心に死をもたらす怪物が居るクレタの迷宮は死の世界だったとも言えよう。

一　ミノタウロスの来歴とテセウス

迷宮神話の筆頭として、「テセウスのミノタウロス退治」を取り上げたが、筆者もむしろ、難問を解く手がかりの喩えとしての「アリアドネの糸」を連想するほどで、ミノタウロス退治そのものの困難さはあまりイメージされてこない。つまり、女性による助力と、迷宮からの帰還が強調されているのである。果たして、この神話の中でのミノタウロスとは何なのか。改めて細部にわたって検討するために、英雄テセウスの出自、ミノス王の運命を少し詳しく見てみよう。以下に少々長いが、ミノス王の出自から順にこの神話のあらすじを見て行きたい。

ミノス王は、フェニキアの王女であったエウロペを母とし、神々の王ゼウスを父としている。

ゼウスは牡牛に変身してエウロペを攫い、フェニキアからクレタに渡ってこれと交わり、ミノスとラダマンテュスとサルペドンの三子を設けた。その後エウロペは、当時のクレタ王のアステリオスの妃となり、三人の子供は、子供の無かった王の養子とされた。

王が死ぬと、兄弟はそれぞれ王位の継承権を争う。ミノスは自分が王位に付くことが神意に適う証しに、彼の祈ることは何でも叶うと言って、ポセイドンに犠牲獣を与えるよう祈る。願いを聞き届けたポセイドンは、生贄に捧げる為の美しい牡牛を海から出現させる。この奇跡によって彼はクレタの王になることが出来たのだが、牡牛の美しさに目が眩んだミノスは、ポセイドンとの約束を破り、他の牛を生贄として捧げ、美しい牡牛は自分の物として横領してしまう。

この行為に対する神罰として、ミノスの妻・パシパエは牡牛を恋い慕うようになり、パシパエはアテネから亡命して来ていた天才工人のダイダロスに牝牛の模型を作らせ、その中に入って、件の牡牛と交わり、牛頭人身のミノタウロスを生む。

ミノスはダイダロスに命じて、迷宮を建てさせ、ミノタウロスをその奥に閉じ込める。

そのうちに、ミノスとパシパエの息子の一人・アンドロゲオスがアテネ王アイゲウス主催の競技会で優勝し、その後殺害されるという事件が起こった。怒ったミノスはアテネを攻め、また、ゼウスに祈って疫病と飢饉を起こしてアテネを苦しめ、勝利する。そして、ミノスの要求により、アテネは以後毎年（一説には九年目ごと）七人の若者と七人の娘をミノタウロスの餌食とするためにクレタに送ることとなる。

一方、テセウスは、トロイゼンの王女アイトラとアイゲウス（一説では、アイトラは、アイゲウスと交わる前日にポセイドンに処女を奪われており、テセウスの父はポセイドンであるとも言う）の間に生まれ、母の国で育った。年頃になったテセウスが、道中、山賊成敗や大猪退治の手柄を立てながらアテネにやって来る。アテネでは、アイゲウスの妻メデイアがテセウスを毒殺しようとしたが、テセウスはこの陰謀から逃れ、身に着けていた剣とサンダルによって身の証しをたて、アイゲウスに嫡子として認知される。そして、クレタへ送られる若者たちの話を聞いたテセウスは自ら志願して仲間に加わり、クレタへと向かう。

（一説では、クレタへ向かう航海中、ミノスがアテネの娘の一人を陵辱しようとしたのをテセウスが制止し、両

者の間に諍いが起こる。ミノスは自分の父がゼウスであると揚言し、対するテセウスは自分はポセイドンの息子だと言い返し、それぞれが父神の神威を示す、奇跡的な行動によって証しを立てる。)

ミノス王の娘アリアドネは、クレタ島に着いたテセウスに一目ぼれし、彼を救うためにダイダロスに相談し、ダイダロスから魔法の糸玉を貰う。アリアドネはテセウスが首尾良くミノタウロスを倒して生還したならば、自分をクレタから連れ出して妻とすることを約束させて、糸玉と剣を与え、迷宮からの脱出方法を教える。テセウスは教えられた通り糸玉の一方の端を入り口に結んでおいたお陰で、ミノタウロスを倒したあと、迷宮から脱出し、仲間と共にアリアドネを連れて船に乗り、クレタから出奔する。しかし、ナクソス島に立ち寄った際、アリアドネはテセウスに置き去りにされ、離別する。激怒したミノスは、ダイダロスとその子以下ロスを迷宮に幽閉するが、二人は蝋と羽根で作った飛行具を作って脱出し、シチリアへ亡命する。ミノスは執拗に追及するが、ダイダロスの知恵を惜しんだシチリア王の策略で、入浴中に王の娘たちによって熱湯を注がれ、死亡する。死後ミノスは、冥界の審判者となったという。

テセウスは、父王アイゲウスに、無事クレタ島から脱出したときは船に白い帆を掲げて帰還すると約束していたがこれを怠り、出航時の黒い帆のまま帰還した。これを見たアイゲウスはテセウスが死んだものと思いこみ、海に身を投げてしまった。アイゲウスが身を投げた海はその名にちなみ、エーゲ海と名づけられた。

アイゲウスを継いで王になったテセウスは憐み深い王としてアテネを治める一方、アマゾンの女王ヒッポリュテをさらい妻としたり、金羊毛皮を捜し求めるアルゴ船探検隊（アルゴナウタイ）の冒険に参加したり、ペイリトオスとともに冥界の女王ペルセポネを誘拐しようとしたり、様々な冒険を行った。

晩年は王位を追われ、スキュロス島の王リュコメデスのもとに身を寄せていたが、リュコメデスはテセウスを裏切り、彼を崖からつき落として殺してしまった。デルポイの神託によって、テセウスの遺骸はアテネに戻され、アテネの人々によって手厚く葬られた。

以上三、ミノタウロスと迷宮の由来を見るために、ミノス王の誕生から辿ってみたが、こうしてみると、ミノスはポセイドンの怒りをかって呪われた哀れな王であり、有名なミノタウロス退治も、テセウスの多くの冒険譚の一部分に過

ぎないように思われる。しかしこれは、アテネによるクレタの征服という、征服者側からの神話であり、ギリシアに先行し、忽然と滅んだミノア文明の、歪められた姿での伝承であるためであろう。テセウスは、アテネ古典期には民主政治の創始者とみなされるほどの国民的英雄とされたので、様々な神話が彼に結び付けられたのだと言われている。

一方、パシパエの生んだ牛頭人身の怪物につけられたミノタウロスという名は、「ミノスの牡牛」という意味だが、これは通称であって、本来、ミノスの養父と同じ「アステリオス」という名がつけられていた。アステリオスとは、星の光あるいは星のような存在者を意味し、事実、古代ギリシアの壺絵師たちは、彼の身体に星を散りばめて描いた[三]。

その母であるパシパエも、太陽神ヘリオスとオケアニスの一人・ペルセイスの娘で「すべてに輝く」という意味の名をもつ者であることから、本来はミノタウロス自身も信仰の対象であったと思われる。また、ミノス自身が牡牛に変身したゼウスの子であることなどから、ミノタウロスをミノス王と同一視する説もある。

二　迷宮

英語で迷宮を意味する〈ラビュリンス〉の語源は、両刃の斧〈ラビュルス〉というクレタの宗教上重要な象徴に由来するといわれている。黄金製で彫刻を施した両刃の斧が、アルカロコリにある聖なる洞窟に奉納されており、また、クノッソス宮殿地下室の角柱には、両刃の斧がデザインされている。ラビュリントスとは〈両刃の斧の館〉というほどの意味である。宮殿は、後のミケーネ文明時代の宮殿と比べると、規模は大きかったが、構造が無秩序で安定感がないということで、この文明の滅んだ後、廃墟となった宮殿の夥しい部屋数や複雑な廊下を見たギリシア人のイマジネーションから迷宮の伝説が生まれたとも言われる。

しかし、ミノタウロスを幽閉した迷宮が、クノッソスの宮殿遺跡であると決まったわけではない。ケレーニイは、ミノス王の領土内にあるゴルティン近郊のある地下採石場が、かなり後代にいたっても迷宮と称されていたことをあげ、ラビュリンスがもとは〈採石場、竪穴や洞窟を夥しく抱えた鉱山施設〉を意味し、そこで使用される斧のラビュルスがおそらくは石斧を意味するとしている。そして、南フランスの採石地帯の遺跡群を例に取り、採石場労働者の用いる特殊な種類の斧は、ローマ時代に墳墓の象徴表現の特徴的な構成要素であったことを指摘し、「迷宮、地下構築物、冥府は、

死の観念の表現形式である。また、この観念からしてのみ、同一の事象がたんに洞窟のうちに認められるだけでなく、たんに建築物として考えられただけでなく、舞踏化されることもありえたことが、明確に了解されるのである。」と、述べている[四]。

この舞踏化された迷宮とは、テセウスがミノタウロスを退治したあと、救助された生贄の若者たちと共に、迷宮への入場と脱出を模して演じられたものだという。踊り手たちは、舞踏図形を演じながら、一本の綱を握っている。つまり、一本の綱によって繋がった長い列を作って踊るのである。

ヘルマン・ケルンは一本道の迷宮を「外部への開口部を持つ円形または矩形の線の幾何学的図形。その線は、その間を通る通路を設定するための境壁と理解できる。」として、以下の六点の特徴を挙げている。

① 十字路がない、すなわち、通路を選択する余地がない。
② つねに振り子のように一八〇度、向きを転ずる。
③ 最大限に迂回して迷宮の内部空間を満たしている。
④ 目標の中心の傍らを繰り返し通過する。
⑤ 必然的に中心にいたる。
⑥ 中心から、ふたたび唯一の出口への通路として外部に通じる。

この迷宮は、通路の迂回方法当会回数によって更にいくつかの型に分類されるが、クレタ型といわれるものは七重の迂回路を持つ[五]もので、クレタ島出土のコインなどにも線描によって描かれている。

つまり、先に述べた舞踏は、迷宮の通路をなぞるアリアドネの糸の再現であり、迷宮内での曲折に合わせて、列が反転するようなときには、必然的に、後続の一団とは反対方向に平行に動く。こうした動きは中心の死の方向へと進み、迷宮の内部空間をすっかりなぞって中心に至る。そこからは再び外部の生の世界へと向かって反転し、長い道のりを再び目指すのである。この踊りは、アリアドネの高次の形態である、アリアドネ-アプロディテーに捧げられるものであり、ゲラノス〈鶴踊り〉という名称だという。

アリアドネの糸の再現が、鶴の踊りであるということは、アリアドネに糸玉を渡したダイダロスが、ミノス王に幽閉された後、イカロスと共に翼を作って迷宮（一説には塔）から脱出したことを思い起こさせる。それは、はじめから、迷宮からの脱出方法は二通りあったことを示唆しているのではあるまいか。

もちろん、テセウスは助けるべき同郷の若者たちを連れて、皆で生還しなければならない。また、迷宮の入り口には、自分の帰りを待つアリアドネが居る。入るより困難とされた帰り道を辿ることが必要な状況である。同時に、そのお陰で、怪物退治を成し遂げた英雄・救国の勇士としての名誉を得ることが出来た。

それに対して、ダイダロスはクレタ島でミノス王の庇護のもと得た、唯一の宝というべき息子のイカロスも失い、ミノスの追求を逃れるために潜伏生活を余儀なくされるのである。

三　テセウスとアドニス・オホクニヌシ

ところで、ギリシア神話と日本神話との比較ということでは、既に吉田敦彦氏が、アドニスとオホクニヌシの神話を次のように詳細に比較して、偶然の一致とは思われないような共通点があることから、オホクニヌシ神話を西アジアのアドニス神話に淵源する、猪に殺害される豊穣神の神話であるとしている。

① オホクニヌシとアドニスは、両者共に狩の最中に猪によって殺されるが、それは、非常な美貌と魅力によって女神の愛を受けたことによって、他の男神の嫉妬を買ったためである。

② また、両者は共に、豊穣機能と密接な関係を持つ「第二機能神」であり、母神との結びつきが強く、何度も殺されては母の手によってよみがえる。

③ アドニスは没薬の木から取り出されて誕生し、オホクニヌシは木に挟まれて死んだところを母神から救い出されて再生される。子供の神も木の俣の神と呼ばれる。

④ アドニスの名前も、セム語の「主」を意味する呼称「アドン」を語源とする。

吉田氏は、この他に色々な神話伝説との比較の上で「ギリシア世界と密接な交渉を持ちギリシア文化の強い影響を受けたことがよく知られている、スキュタイ人の神話が、アルタイ系騎馬遊牧民に受容され、朝鮮半島を経由して日本にまで持ち込まれ、天皇家の神話のおもな枠組みを成した結果、生じたと考えて」「日本にもたらされたと思われるギリシア神話の影響が、電波の経路に当たったと想定されるスキュタイおよび朝鮮の古代神話中に受容されていた痕跡が、これら両地域の神話について、今日われわれの利用しうる乏しい資料の中にも明瞭に覗見される」[六]としている。

ところで、テセウスのミノタウロス退治を一種の冥界への旅と考え、オホクニヌシの根の国訪問と比較してみると、むしろ相反する点がいくつか浮かび上がってくる。それが何を意味し、どういう由来を持って成立したのか、ギリシア神話に関して門外漢である筆者が取り組むには、少々荷が重いが、〃不思議な不一致〃あるいは「逆転現象」を追ってみるのも、あながち意味の無いことではないだろう。

既に概観してみたように、テセウスはアテネ古典期には建国の父であり国民的英雄とみなされ、あらゆる〃英雄的〃行為をテセウスに集約したかのような、所謂「英雄神話」が成り立っている。テセウスは母の国で父の名を知らされずに育つ。岩の下に隠されていた父の残したサンダルと剣を取り出せるまでに成長し、初めて父の名を知る。そして、苦難の旅で幾多の手柄を立てつつ父の国アテネへ辿り着くも、父の国でもマラトンの牡牛退治を命ぜられ、王妃メディアに殺されかける。こうした紆余曲折を経てようやく王子と認められ、貴種流離譚の要素も含む。

この旅は、海路で行けばたやすいものをあえて困難な陸路を選んで行ったとされ、道中多くの山賊や怪物をたおす。

まずエピダウロス近郊で「棍棒男（コリュネテス）」というあだ名を持つペリペテスと出会う。彼はヘパイストスとアンティクレイアの子といわれており、鉄の棍棒で旅人を殺す追いはぎであったが、テセウスはなんなくペリペテスを殺して、戦利品として彼の使用していた棍棒を自分の通常武器に加えた。

そしてコリントスのイストモス地峡に差し掛かった場所で「松曲男（ピチュオカンプテス）」というあだ名を持つ男シニスと出会う。この男は旅人を捕まえて二本の曲げた松の木に一本ずつ足をくくりつけ、しなっていた松の木を放し、旅人を真っ二つに引き裂くという残忍な殺人を繰り返していた。テセウスは同様にしてこの男を殺害し、旅を続ける。

また、クロミュオンの地では、パイアという狂暴な白大猪の牝を退治した。これは、女盗賊の変身したものだとも言われる。

この他にも、旅人に危害を加える賊を討伐しているが、最初に棍棒を自分の得物としたように、いずれも計略などではなく、直接的・暴力的な方法で殺害を加えている。

これらの事柄は、オホクニヌシが八十神の八上比売への求婚の旅に従者として付き従った時、八十神によって受けた迫害を逆転させたかのようである。すなわち、女の化身した猪を退治し、オホクニヌシが引き裂かれた木の股に挟まれて圧死したのとは逆に、日本の木の反発力で身体を引き裂いて殺害している。

また、アテネに辿り着いたテセウスは、父であるアテネ王に息子であると直ちには理解されず、マラトンの牡牛退治という難題を課せられる。これは、系譜的にも祖神であり、後にスセリヒメとの婚姻によって岳父となるスサノヲが、根の国を訪れたオホクニヌシを一目見ただけで、その資質と現状を看破して「こは葦原色許男の命と謂ふぞ」と呼び入れて、蛇の室へ寝かせたのと全く逆の様相を呈している。

テセウスは、ミノタウロス退治という苦難の旅も、自ら志願して出立する。

オホクニヌシの根の国訪問は、オホヤビコの「かならずその大神議りたなひなむ」と言う、彼の庇護者の計らいにより送り出された旅である。スサノヲに、どうにか八十神による迫害を取り除く方法を教えて貰おうというのであり、根の国に死の危険を求めて行くのではない。

アリアドネとスセリヒメの有り様も異なっている。

両者共に、男神を助ける呪具を授け、助けた男神との婚姻を結んでいるように見えるが、実はそうではない。

スセリヒメは、蛇の領巾・ムカデ蜂の領巾という、自分の衣類の一部を与えることで、オホクニヌシを助けるが、鏑矢を射入れた野に火をかけられたときは、なすすべも無く、オホクニヌシを喪ったものと思い、泣きくれる。つまり、根の国に仕掛けられた困難を払いのけるのはスセリヒメの呪力である。しかも、その困難を本質的に取り除くことはせず、やり過ごすだけなのである。

これに対し、アリアドネの糸は、実はミノタウロス退治そのものには全く力は貸さない。あくまでも、迷宮からの帰還の助けなのである。しかも、これまで見てきた迷宮の定義を考えるとき、アリアドネの糸は、迷宮を線描化したときの壁を示す線に他ならず、ある意味で、アリアドネは迷宮そのものとも思われるのだ。つまり、アリアドネとミノタウロスはお互いを欠くことの出来ない迷宮の構成要素である。ミノタウロスという中心が失われれば、もはや迷宮は成立

しない。テセウスがミノタウロスの遺骸を引きずり出したとき、迷宮は崩壊し、解けた糸は巻き戻される。異父兄弟を敵に売り渡した王女であるから故国を離れるのではない。ミノタウロスの居ないクレタには、アリアドネが留まる意味は無くなるのである。アリアドネの望みは、婚姻という形でのクレタからの脱出というよりは、自身の迷宮からの解放だったのではないだろうか。

同じく肉親を、父を裏切ったスセリヒメは、それにも拘らず父神に祝福され、名実共に「大国主」となった夫と共に出雲の壮大な宮殿に鎮まった。しかし、アリアドネは（一説には、アテネにつれて帰ると不幸が起こるという神託を受けたために、故意に）旅の途中でテセウスに置き去りにされ、テセウスは糸玉を授かる代わりにたてた婚姻の誓いを破るのである。とはいえ、テセウスはその後、迷宮への侵入と生還という死と再生の記憶を永続化するために、〃自らがアリアドネの糸となって〃、迷宮の内部空間を再現する舞踏――鶴の踊り――を踊り、神に奉納している。これは換言すれば、テセウスは婚姻という形ではないものの、アリアドネと一体化し、迷宮の冥府性を獲得しだのだとも言える。こうした視点からすれば、後に親友ペイリトオスとともに、冥界の女王ペルセポネを誘拐しようとしたとき、一度はハデスの計略にかかって、忘却の椅子に捕らえられたにも関わらず、ヘラクレスに助けられ、地上に戻ることが出来たのだとも言える。

こういう訳で、ミノス王の怒りは、ダイダロスに向けられる。ダイダロスこそはミノタウロスをこの世に生み出す仕掛けを作り出し、それを隠すための地上の冥府を建設した責任者なのだ。逃亡したダイダロスを探す手立てとなったのも、「カタツムリの殻の中の羊腸のように曲がりくねった空洞に糸を通した者に莫大な報奨金を与える」という罠であった。この謎を解けるのは、迷宮の設計者しかいない。ダイダロスを追い詰めたミノスは、シチリア王の計略のためにダイダロスを取り返すことは出来なかったが、死後に冥府の審判者となるのである。

ミノスとミノタウロスに同一性を見出すとするならば、ミノスも冥界の中心であろう。迷宮を失ったために、中心にあったはずのミノスも、クレタ島を離れて、ダイダロスを追及する旅路に着くことになる。アリアドネの望みが、迷宮の崩壊とそこからの開放であったとするならば、オホクニヌシの根の国訪問譚ともたらされる結果が異なるのは自明である。では、根の国の中心は何であったのか。

オホクニヌシは、蛇の室、ムカデ蜂の室、ネズミの招きいれてくれたムロを無事に通過し、最後にスサノヲに家の「八

田間の大室」へと呼び入れられる。そこで、スサノヲの頭の虱を取るという、最後の試練を課されるが、頭の虱は、実際には危険なムカデであり、ここでもオホクニヌシは妻の助けによって、根本的な対立を避けたまま、この試練もクリアする。つまり、椋の実と赤土の偽装によって、すっかり騙されたスサノヲは、オホクニヌシに好意すら抱いて眠ってしまう。そこでオホクニヌシは、スサノヲの髪を取って、家の垂木ごとに結びつけ、巨石で家の戸口を塞いで、スセリヒメと生大刀・生弓矢・天の沼琴を持って逃げ出すのだ。つまり、八田間の大室という迷宮の中心に至って、その中心に居る怪物をたおすことなく、宝だけを持ち去り、生の世界への帰路に着くのである。

自分の頭髪でもって部屋の中心に、身動きできないように縛り付けられるスサノヲの姿は、あたかも自分の吐いた糸に絡まってもがく、間抜けな蜘蛛のようでもあり、滑稽ですらある。逃げるオホクニヌシの抱えた天の沼琴が、樹に触れて地響きを轟かす。驚いたスサノヲは慌てて家を引き倒してしまう。しかし、最終的に、根の国のこうむった損害はそこまでで、スサノヲはオホクニヌシの将来を寿ぐのである。

おわりに

本稿では、迷宮の持つ冥府性を手がかりに、テセウスを主人公とする神話と、オホクニヌシの根の国訪問譚との比較を試みた。そもそも日本の神話では、西欧世界での所謂完全な「英雄神話」は無く、それが日本人の心性、自我意識の発達段階の特徴をも示しているという主張がある[七]。そうであれば、この比較自体の意味も問われるだろう。また、日本神話、あるいは説話に、もっと比較検討すべきものがあるかも知れない。また、これらの対応関係を説話の構造などから更に整理して、あるいは欠落する要素なども考えることも可能かとは思われるが、今回筆者は、限られた時間と能力の問題で、自分の気付いた範囲内での対応関係を見るに留まった。不明の点、ご教示を賜れば幸いである。

注

一　厳密に言えば、迷宮と迷路は異なる。前者は中心を目指した後、反転して入ってきた入り口へと戻ることが必要であり、すべての道を通過することが本質的に求められる。後者は入り口から出口にいたる一本道が貫かれているもので、複数の分岐した小径や袋小路が設定されて、惑わされるが、以下に最短で出口へ到達するかが求められる。ファンタジーの中で、主人公ハリーポッターは、優勝杯を手にした途端、宿敵の罠で本拠地である墓地に飛ばされ、親友セドリックは敵の手にかかり命を落とす。そして再び大迷路の入り口へと戻っている。つまり、実質的には迷宮への侵入とそこからの生還である。

二　吉田敦彦「アトランティス伝説とクレタ島のミノア文明」『ギリシア人の性と幻想』青土社　一九九七年一月　ほか参考

三　ヘルムート・ヤスコルスキー『迷宮の神話学』城眞一訳　青土社　一九九八年一二月

四　カール・ケレーニイ『迷宮と神話』種村季弘・藤川芳朗訳　弘文堂　一九七三年三月

五　ケルンの定義は、注三のヤスコルスキーの纏めたものを引用した。

六　吉田敦彦『ヤマトタケルと大国主』みすず書房　一九七九年一月　ほか

七　こうしたユング心理学的見地からの議論は、河合隼雄・湯浅泰雄・吉田敦彦の鼎談から始まって、以後度々語られている。河合・湯浅・吉田『日本神話の思想』ミネルヴァ書房　一九八三年八月　ほかを参照されたい。